憬興師と唐仏教の交渉

渡　辺　顕　正

一

新羅の国、第三十一代神文王、第三十二代文武王の命により、国師・国老として仏教学界に活躍した憬興師については、その伝記の詳細は不明であるが、高麗麟角寺一然の撰である『三国遺事』[1]巻第五「感通第七」の条下に、「憬興遇聖」と掲げて伝記の一端が記されてある。それによれば、年十八歳で出家し、神文元年（681）に国師・国老となり三郎寺に住した等と記されてある。すなわち、神文元年は唐の開耀元年（681）にあたり、開耀元年は永隆二年に改元された年号である。

よつて、憬興師の出世年代は、隋（589～618）滅亡し、唐朝成立(619)の時期の前後、六二〇年頃かと推定される。また、国師・国老となられたのは六八一年であるから、六十歳頃とおもわれる。寂時は不詳である。

新羅の半島統一までの経過は、まず唐・新羅の連合により百済を滅ぼし（660(663)）、ついで高句麗の滅亡(668)、百済の全部と高句麗の南半を併合して、事実上の半島統一は六七六年のことであつた。よつて新羅の半島を統一的に支配したのは、六六八年から九三五年に至る約二七〇年間であつた。この支配期間は、唐（619～907）が、ほぼ大陸を支配した時期に相当する。この間、新羅は年々使節を唐に送り、留学生・留学僧を唐に派遣して、唐文化、とくに仏教文化をはじめ、各種の制度文物の吸収につとめたのであつた。

以上のことを考察するに、憬興師は新羅文化の極盛期に活躍した仏教学界の巨匠であるから、いまは、その名著『無量寿経連義述文賛』[2]や『三弥勒経疏』[3]等によつて、唐仏教との交渉面を探究して行きたいと思うのである。

二

憬興師と同時代の人を検するに、玄奘三蔵(602～664)、道宣律師(596～667)、賢首大師法蔵（643～）、善導大師（613～681）、慈恩大師窺基（～682）、慈愍三蔵慧日（680～748）、新羅元暁師（617～686）、法位・玄一師等を挙げることができる。法位・玄

一師については、『述文賛』によると、「玄公云」、「位法師云」といって、両師の説を出してあるによって、憬興師と同時代の人であることが知られる。

憬興師の著書『三弥勒経疏』によれば、「玄奘三蔵云」、「奘法師云」といって四、五回出し、同じく玄奘の弟子で法相宗の大成者慈恩大師窺基をば十一回の多きにわたってその学説を引用されてある。

また、『三弥勒経疏』によれば、「唐世諸師云」といってあるから、豊富な唐仏教文化と交流しつつ、新羅仏教界に活動せしことは自明のことである。

三

『無量寿経連義述文賛』所引の経典や論の中、はじめに唐訳の経典と論を挙げると次の如くである。

称讃浄土経（唐・玄奘訳）、仁王般若経（唐・地婆訶羅訳）、仏地経（唐・玄奘訳）、華厳経（四十巻本―唐・般若訳　八十巻本―唐・実叉難陀訳）、大乗密厳経（唐・地婆訶羅訳）、法住記（唐・玄奘訳、六五四年訳、玄奘入滅十年前の訳）等である。

論については、仏地論（仏地経論）、唯識論（成唯識論）、瑜伽論（瑜伽師地論）、以上いずれも唐の玄奘訳であり、その他、唐の懐感撰の釈浄土群疑論が引用されてある。

その他、浄伝（南海寄帰伝・唐義浄撰）、周礼（経書の名・唐の大学博士賈公彦の著）、玉篇（唐時代に改刪）等を挙げることができる。

次に、『三弥勒経疏』によれば、般若経（大般若波羅蜜多経）、七仏経（受持七仏名号所生功徳経）、称讃浄土経（称讃浄土仏摂受経）、以上いずれも唐の玄奘訳を引用し、また、唐の般刺蜜帝訳である首楞厳経（大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経）を引用してある。

次に、憬興師の著『観経疏』[4]によれば、竜樹菩薩の十二礼を引用してあるが、その十二礼は、唐の迦才の著書『浄土論』中の十二礼の文である。

なお、ここに注意べきことは、以上の憬興師の著述に、唐の菩提流志（覚愛）訳の『無量寿如来会』（706～713頃の訳出）が引用されてないから、寂時は不詳ではあるが、少くとも憬興師は七十歳頃（691）か八十歳頃（701）までは活躍されたかと想われる。

また、玄奘訳等を多く引用されてある面より考察するなら、憬興師の教学は法相宗系に属しながらも、浄土教学の思想考究につくされたことは、無量寿経の註釈書として有名な『無量寿経連義述文賛』の著述を解明することによって、自ら知ることができると思う。

四

憬興師は、『無量寿経連義述文賛』において、竺法護訳の無量寿経の正宗分の大科を分節して、その中を六節に分け、

その第六を「如来広説」とし、その中を、さらに二節に分け、「㈠広説如来浄土因果即所行所成也、㈡広顕衆生往生因果即所摂所益也」と記してある。

この二節の科段の名目について探究するならば、「如来浄土因果、衆生往生因果」等の造語は、嘉祥寺吉蔵師（549～625）の『両巻無量寿経宗要』の科段の名目を承けられたものであろうと思われる。すなわち、吉蔵師の科段によれば、『此[3]経宗致凡有二例　一者法蔵修因感浄土果　二者勧物修因往生彼土(果)』といい、元暁師の科段によれば、「第[4]二簡宗致者　此経正以浄土因果為其宗体　摂物往生以為意致」等とあるによって知られる。

また、「所行所成　所摂所益」の名目は、浄影寺慧遠師（523～592）の著書『無量寿経義疏』の科段の中の造語である。「所[7]行所成、所摂教化利益（所益）」の名目を承けられたものであろうとおもわれる。ここに、隋末唐初の無量寿経を註釈する吉蔵師、元[8]暁師、慧遠師の三家の大科を会合して、以つて憬興師自身、一経の正宗分の大科とされるのである。

五

憬興師は、『無量寿経』流通分の「当来之世経道滅尽　我以慈悲哀愍　特留此経止住百歳　其有衆生値斯経者　随意所願皆可得度」の経文をば、「歎二経普済一」と分科して、「有説」といって地論宗系の浄影寺慧遠師（523～592）の『無量寿経義疏』の説を引用して、これを批判し、「此恐不レ然」といって、唐の玄奘訳の『法[9]住記』の説をあげ末法思想観を述べてある。法住記は難提蜜多羅（唐言二慶友一）すなわち慶友尊者が仏説を伝えて記されたものである。

おもうに、浄[10]影寺慧遠師の説（正法五百年像法千年末法万年…）も経説（大方等大集経月蔵分第十二法滅尽品、摩訶摩耶経(下)等）に基づく妥当な説にもかかわらず、憬興師は何故に法住記によられたのであろうか。このことについては、善導の高弟で、しかも法相教学の師たる唐の千福寺憬感（唐の高宗・中宗の頃？）の説を承けられたのであろうと思われる。『釈[11]浄土群疑論』巻三によれば、二説を並用してある。憬興師は、これら両説の中、とくに慶友尊者の『法住記』を引用して、刀兵劫の相を説かれたのであろうと思われる。

1 大正蔵経第四十九巻所収
2 大正蔵経第三十七巻所収
3 大正蔵経第三十八巻所収
4 拙著『新羅・憬興師述文賛の研究』第五章観経疏復元本参照
5 大正蔵経第三十七巻一一六頁(下)
6 大正蔵経第三十七巻一一五頁(下)
7 大正蔵経第三十七巻一〇〇頁(下)～一〇一頁(上)参照
8 元暁著『仏説阿弥陀経疏』の撰号「唐海東新羅国沙門元暁述」（大正蔵経第三十七巻）
9 大正蔵経第四十九巻所収。具名（大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記）
10 大正蔵経第三十七巻一一六頁(上)
11 浄土宗全書(六)四四頁～四五頁参照

（清水ケ丘高等学校教諭）